

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 18 日現在

機関番号：11501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2014

課題番号：25770282

研究課題名(和文)ペルー中央高地における初期文明形成過程の研究

研究課題名(英文)Emergence of an Early Civilization in the Central Andes

研究代表者

松本 雄一(Matsumoto, Yuichi)

山形大学・人文学部・准教授

研究者番号：90644550

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：アンデス中央高地において紀元前1000-500年に栄えたカンパヌック・ルミ神殿の発掘調査を行い、神殿を中心とした社会の成立過程をこれまで注目されなかった居住域の調査を通じて考察した。その結果、居住域と神殿での儀礼が相互に不可分なものであり、人々の生活と神殿での儀礼が密接に関連していたことが判明した。また、神殿の成立と遠隔地交流の関係を考察するためにペルー南海岸において遺跡分布調査を行った結果、高地に近い河川の上流域に同時期の遺跡が多く分布することが判明した。これによって、海岸の社会が高地における初期文明の成立に果たした役割を理解する手がかりが得られた。

研究成果の概要(英文)：In 2013, we excavated the site of Campanayuq Rumi, a ceremonial center that flourished from 1000 B.C. to 500B.C. as a possible pilgrimage center. The main objective of this project was to understand the formation process of early societies centered on ceremonial centers. For this purpose, our excavation focused on the residential areas surrounding the monumental architecture, which had been generally ignored in the previous studies. As a result, it became clear that the rituals in both the ceremonial center and residential areas cannot be separated and rather they were integrated. A survey was also carried out in the south coast for the purpose of understanding the correlations between the emergence of highland ceremonial center and coast-highland interactions. This research demonstrates that more contemporary sites are distributed in the upper valley and thus provide an important clue to consider the role of coastal societies in the emergence of early civilizations in the highland.

研究分野：考古学、人類学

キーワード：古代文明 文明形成 モニュメント セトルメントパターン

1. 研究開始当初の背景

(1) 古代文明の形成過程の研究においては、独自に発生した「一次文明」に注目が集まる一方で、他の社会の影響を受けて成立した「二次文明」の成立過程に関する研究が不十分な状況であった。

(2) アンデス考古学においては、遠隔地交流と中央高地の初期文明の形成に関する考察が少ない状況であった。

(3) 調査の対象となったペルー中央高地と南海岸は、文明形成の初期段階とされる形成期(紀元前 3000-紀元前 50 年)の研究において空白地帯となっていた。

(4) アンデス考古学の形成期研究において、調査が神殿に集中する傾向があり、人々が実際に生活していた居住域の研究が極めて不足していた。つまり人々の日常生活の研究が無視される傾向にあった。

2. 研究の目的

(1) アンデス中央高地において文明形成の初期段階とされる神殿を中心とした社会がどのように成立したかを明らかにする。

(2) 前述の「二次文明」に関する問題を考察するため、遠隔地交流と神殿の成立がどのように関わりあっていたのかを解明する。

(3) 形成期のデータが極めて少ないアンデス中央高地(特にその南部)において基礎的な考古学的データを蓄積する。

(4) これまで研究事例が極めて少ない「神殿周囲の居住域」の考古学的データを得る。またそれによって、神殿を維持し、儀礼を挙行していた人々の生活や社会組織を考察するためのデータを得る。

3. 研究の方法

(1) ペルー共和国アヤクーチョ県ビルカスワマン群に位置する神殿遺跡、カンパナユック・ルミにおいて発掘調査を行った。同遺跡に関しては、本研究開始以前の申請者の調査によって「紀元前 1000 年ごろに、550km 北に離れた大神殿チャビン・デ・ワンタルの影響下に成立したペルー中央高地最大級の神殿である」ことが既に明らかとなっていた。したがって、外部からの影響、地域間交流というものが文明形成にどのような役割を果たしたかを考察するために極めて適した調査対象であった。

そこで同遺跡において、神殿と居住域の双方において発掘調査をおこない、「神殿と居住域がどのような関係にあったか」、「居住域における人々の生活はどのようなものであったか」を生業体系と社会組織の側面から明らかにすることを試みた。

(2) 本研究開始以前の申請者の調査によって、カンパナユック・ルミにおいては社会の階層化の萌芽がペルー南海岸の物質文化の同遺跡への流入と同時に起こったことが明らかとなっており、神殿を中心とした社会の成立に海岸と高地の遠隔地間の交流が関わ

っていたことが示唆されていた。そこで、南海岸のインヘニオ谷に焦点を当て、遺跡分布調査を行い。海岸部における同時期の遺跡に関するデータを得ることを試みた。

(3) 文明形勢における遠隔地交流の役割をさらに実証的に考察するため、イェール大学、ペルー国立サン・アントニオ・デル・アバド大学との協力の下、カンパナユック・ルミ遺跡出土の黒曜石製品 394 点に関して蛍光 X 線分析を行い、その原産地の同定を行った。

(4) 神殿周囲の居住域における編年が神殿の編年とどのように関わっているのかを考察するため、山形大学高感度加速器質量分析センターとの協力のもと、出土炭化物の年代測定を行った。

4. 研究成果

(1) 神殿建築の調査によって、神殿建造以前の活動の痕跡を確認することができた。これまで不明確であった、神殿成立以前の遺物様式に関して新たな知見が得られた。最初の神殿建築に対応するものと類似した土器様式が神殿成立以前の層位からも確認され、神殿の建造にはそれ以前から居住していた人々が重要な役割を担っていた可能性が示唆される結果となった。これまでの調査から、神殿の建造には外部の集団が関わっていたことも示されているため、今後の研究によって「様々な地域の集団の間の交流が神殿を中心とした社会の開始にどのように関わっていたのか」というテーマを考察することが可能になるという見通しが得られた。

(2) カンパナユック・ルミにおいては、神殿建築の北と南に居住域が確認されていたが、その双方において社会の階層化の萌芽が見られる後半の時期(カンパナユック II 期: 紀元前 700-500 年)に居住域が拡大したことが明らかとなった。この時期は、海岸部との交流が活発化した時期であり、地域間交流と社会変化に相関関係が認められた。

(3) 神殿南の居住域からは、同時期に類例がない極めて貴重な儀礼施設が発見された。最も重要な建築は直径 5m ほどの円形の建築であり、数多くの柱によって他から隔てられた空間であったと考えられる。その中に 12 の奉納儀礼に用いられたと考えられる穴が発見された。内二つからは、人間の頭骨が副葬品と共に発見された。一つ目の穴からは、人間の頭骨とともに 4 つの椀型土器が出土し、そのうち少なくとも一つは意図的に破壊されたものであった。他の土器には、200km 以上離れた南海岸から持ち込まれたと考えられるものが含まれていた。人間の首を用いて、さらに意図的に土器を破壊するというこれまで形成期に類例の見られない儀礼の存在が明らかとなった。また、在地の土器と南海岸の土器の共伴は巡礼センターとしての神殿というこれまでの調査で示された仮説を補強するものと考えられる。

もう一つの儀礼の痕跡はさらに複雑なも

のであり、複雑な形状のくぼみの中から、人間の頭骨が2つ並んだ状態で出現し、その下から、さかさまになった土製品が出土した。この土製品はおそらくカンパナユック・ルミ神殿の基壇建築を模したものであり、神殿の模型とも言うべきものと考えられる。現時点では他に類例の存在しない希少なものである。対応する層位の絶対年代は紀元前 800 年前後を示しており、建築の模型としてはアンデスにおいて極めて古い部類に属すると考えられる。



(図 1 カンパナユック・ルミ遺跡南居住域から出土した神殿の模型と考えられる土製品 下部直径 28cm)

頭骨の下に配置されたこの模型のさらには下からは、金製の耳飾りが出土した。北高地の同時代の大神殿で発見されているものと類似しており、金製の装飾品としてはペルー中央高地において最古級のものである。さらに他の穴からも、意図的に破壊された土器や頭骨の一部が発見された。

これまで類例のない、神殿外部の居住域における儀礼の痕跡の事例という点で極めて重要である。このデータからは、神殿の外部において、神殿で行われたものとは異なる、人間の首級を用いた儀礼行為が行われていたことが読み取れる。一方で神殿の模型の存在は、その儀礼行為が神殿と切り離されたものではなかったことを、そして金製の耳飾りの存在は当時の社会に生まれつつあったエリート層が居住域の儀礼にも関わっていたことをそれぞれ示唆している。また、遠く離れた南海岸からもたらされた土器の存在は、このようなエリート層が地域間交流を掌握していたことを示す可能性がある。神殿の儀礼と神殿外の儀礼の関係が明らかとなった初めての事例といつてよい。さらにエリート層を有する社会組織と遠隔地交流を関連付ける貴重なデータである。

(4) 神殿北の居住域からは、直径 7m ほどの円形の石造建造物が発見された。床面が丁寧に清掃された後に埋められており、儀礼を行う空間であったと考えられる。この建築の床面には、やはり建築の模型と思われる土製品がすえつけられており、土偶などが出土し

ている。やはり神殿の外部に、神殿とは異なる儀礼空間が存在していたことを示す事例であるが、その儀礼は先述の神殿南の人間の首級を埋葬するというものとは異なっていた。先の神殿南の居住域の儀礼空間の事例と合わせると、神殿の北と南で異なる儀礼が行われる空間が存在することになり、異なる集団が異なる儀礼を営んでいた可能性が指摘可能であり、神殿に属する集団が一つではなかった可能性が示唆される結果となった。

(5) 2014 年度に行ったインヘニオ谷上・中流域の調査においては、81 の遺跡において踏査と登録を行った。そのうちカンパナユック・ルミと対応すると考えられる時期の遺跡は7つであり、小規模な遺跡が主に上流の側に分布することが明らかとなった。カンパナユック・ルミでの発掘データとあわせて考えると、海岸部の大神殿を持たない小規模な社会が、高地の大神殿であるカンパナユック・ルミを訪れたという仮説を補強するデータであるといえる。

この調査においては、形成期以外にもナスカ期(紀元前 200-紀元後 700 年)、ワリ期(紀元後 700-1000 年)、イカ期(紀元後 1000-1500 年)のデータも得られており、同地域における 2000 年以上の社会変化を考察するための基礎資料を得ることができた。

(6) 2014 年にはイェール大学、ペルー国立サン・アントニオ・アバド大学主催のワークショップにおいて、2013 年の調査で得られた黒曜石資料 394 点の蛍光 X 線分析を行った。アンデス形成期において最大規模の資料数を用いた分析であり、高地の各地に分布する少なくとも 6 つの原産地からカンパナユック・ルミへと黒曜石が搬入されていたことが明らかとなった。また、海岸部で発見されている黒曜石が、カンパナユック・ルミにももたらされていたことが判明し、同遺跡が地域間交流の結節点として重要な役割を果たしていたことが示された。

(7) 山形大学高感度加速器質量分析センターとの協力のもと、カンパナユック・ルミ出土炭化物の年代測定を行い、このような地域間交流の活発化が紀元前 700 年ごろに対応することが明らかとなった。階層化の萌芽と地域間交流が活発化する時期が一致することが確認された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

Nesbitt, Jason and Yuichi Matsumoto
Cupisnique Pottery from Campanayuc Rumi, South-central Highlands of Peru: Implications for Late Initial Period Interaction.

Peruvian Archaeology Vol. 1, 2014, 47-61.
(査読有)

〔学会発表〕(計 5 件)

Matsumoto, Yuichi

“Paracas en la sierra: una perspectiva desde Campanayuq Rumi”.
Simposio Internacional “Desarrollo y Cambio de las Sociedades Prehispanicas en la Costa Sur del Perú”, 16 de Febrero, 2014, Museo Nacional de Etnología, Osaka.

Matsumoto, Yuichi, Jason Nesbitt, Yuri Caverro Palomino, y Edison Mendoza.

“Actividades rituales en las áreas circundantes al centro ceremonial Campanayuq Rumi”.

“I Congreso Nacional de Arqueología”, 20 de Agosto, 2014, Museo de la Nación.

松本雄一、ジェイソン・ネスビット、マイケル・グラスコック、ユリ・カベロ・パロミノ、リチャード・バーガー

「アンデス形成期における黒曜石の流通と地域間交流：カンパナユック・ルミ遺跡出土黒曜石の蛍光X線分析から」

古代アメリカ学会代 19 回大会、2014 年 12 月 7 日、於名古屋大学。

Matsumoto, Yuichi

“¿Ritual Domestica?: Manejo del espacio ritual en el centro ceremonial de Campanayuq Rumi.”

Simposio Internacional “La Produccion de los espacios rituales en las regiones de la zona sur de los Andes”, 11 de Febrero, 2015. 於 キャンパスイノベーションセンター。

Nesbitt, Jason, Yuichi Matsumoto, Michael Glascock, Yuri Caverro Palomino, and Richard Burger.

“Sourcing the Obsidian from Campanayuq Rumi: Implications for Understanding Chavín Interaction”, Society for American Archaeology 80th Annual Meeting, April 18, 2015, Hilton San Francisco Union Square Hotel.

Matsumoto, Yuichi

“Chavin en la Costa y Paracas en la Sierra: Interaccion Interregional durante el Horizonte Temprano”
55 Congreso Internacional de Americanista.
(2015 年 7 月発表確定)

Matsumoto, Yuichi, Jason Nesbitt, Yuri Caverro Palomino, y Edison Mendoza.

“¿Maquetas Representando Arquitectura Pública?: Nuevos Hallazgos desde Campanayuq Rumi”

55 Congreso Internacional de Americanista.

(2015 年 7 月発表確定)

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

松本雄一 (山形大学)

研究者番号 : 90644550